

踏み応へ

山田真砂年

嗚呼といひて草隠れなる蛇莓

道をしへ虚子の通ひし水車小屋

守宮出づ一里塚とはこの辺り

拳ほどの力石あり青葉木菟

目を剥いて銀座を歩く日の盛り

雨粒がぼつんと蟻が蟻はこぶ

神木に風のさ走る遠青嶺

夏草をづかづか踏んで土俵際

夏雲を所定の位置に大浅間

夏草のしたたかなりし踏み応へ

三百年の匂ふ三和土にかなぶんぶん

茄子の花遠嶺にかかる雲まぶし

虎が雨男の子の好きな力石

松蘿さらさら山気降りてくる

蓮の葉の池を三尺膨らませ

片蔭の途切れしところ消火栓

ぢぢと来てコツンカサコソ窓の蟬

合歓ちつてまこと気怠き昼下がり

蟬声のじれつたさうに生まれり

蟬時雨村の真中に火の見櫓

手秤で選びし瓜や三つ買ふ

油蟬尻を重たく木を攀る

谷底に静かな空気葛の花

稲の花埃のやうに散りにけり

稲穂いま成長痛の揺れの中